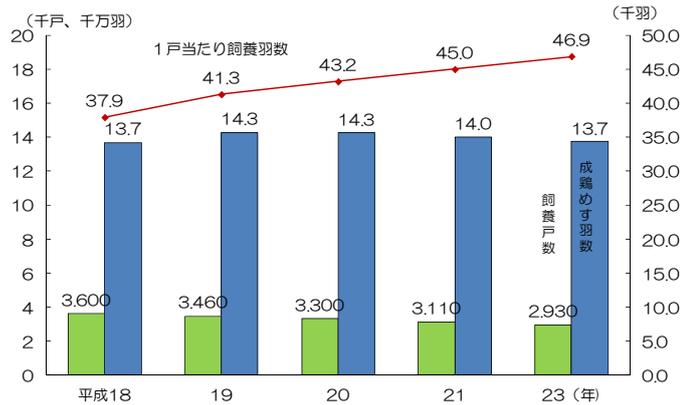


鶏卵

◆飼養動向

23年2月の採卵鶏の飼養羽数は1億3千7百万羽(▲1.8%)とわずかに減少

図1 採卵鶏の飼養戸数、成鶏めす羽数



23年2月現在の採卵鶏の飼養戸数は、2,930戸で前回調査より180戸(▲5.8%)減少した。一方、成鶏めす羽数は、1億3千7百万羽(▲1.8%)となった。この結果、1戸当たりの成鶏めす羽数は、10万羽以上の規模の飼養羽数増加により4万6,900羽(4.2%)と約1,900羽増加した(図1)。

資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」

注1：数値は各年の2月1日現在

2：成鶏めすとは種鶏を除く6カ月以上のめすをいう。

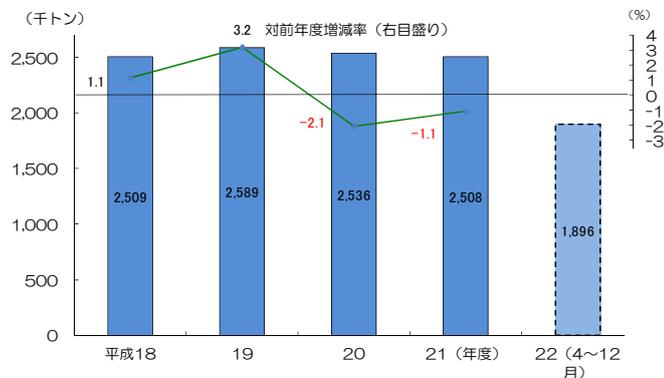
3：飼養戸数は、種鶏およびひな(6カ月未満)のみの飼養者および成鶏めす羽数1千羽数未満の飼養者を除く。

4：22年は世界農業センサスの調査年であるため比較できるデータがない。

◆生産

22年度(4~12月)の生産量は189万6千トン(0.4%)とわずかに増加

図2 鶏卵の生産量



世界的に鳥インフルエンザが猛威をふるう中、国内でも鳥インフルエンザ発生が影響し、鶏卵生産量は17年度に一時的に低下したが、その後は回復に向かい19年度には258万9千トン(3.2%)とピークに達した。しかし、20年度はひな餌付け羽数の減少等から253万6千トン(▲2.1%)と減少し、21年度も250万1千トン(▲1.0%)と減少した。

22年度(4~12月)は前年同期をわずかに上回る189万6千トン(0.4%)となった(図2)。

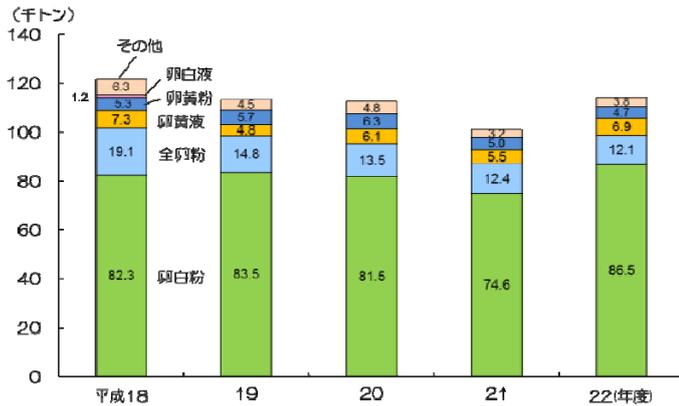
資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：23年1月以降のデータは未公表

◆輸 入

22年度の輸入量(殻付き換算ベース)は、11万4千トン(13.1%)とかなり大きく増加

図3 鶏卵の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き換算ベース

鶏卵の輸入量(殻付き換算ベース)は通常、国内需要量の3~5%程度を占めるが、国内の生産量、価格動向、為替相場などの影響を受けて変動する。

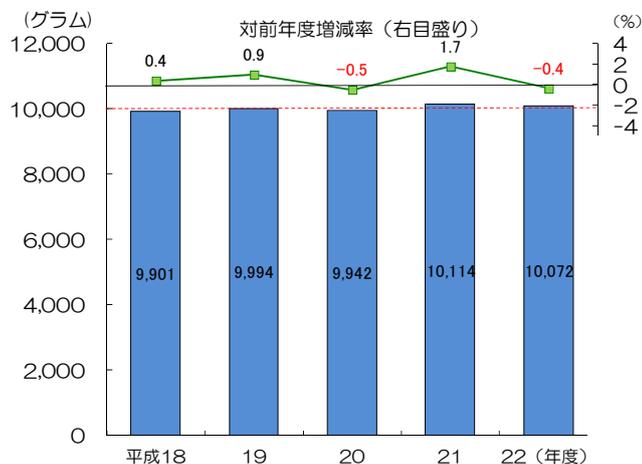
21年度は前年に比べて卸売価格が安価で推移したことなどから国産品への需要が高まり、10万1千トン(▲10.1%)と減少した。

一方、22年度は卸売価格が前年より上昇したことなどから輸入品に需要がシフトし、11万4千トン(13.1%)とかなり大きく増加した。なお、主な輸入先は、オランダ、イタリア、米国などであった(図3)。

◆消 費

22年度の家計消費量(1人当たり)は、10,072グラム(▲0.4%)とわずかに減少

図4 鶏卵の家計消費量(1人当たり)



資料：総務省「家計調査報告」

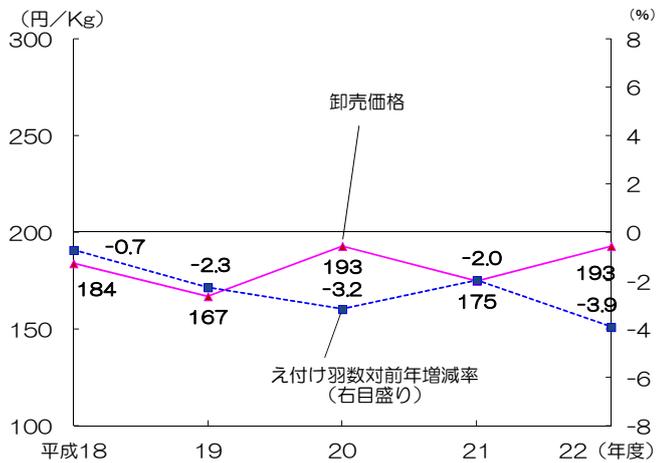
1人当たりの家計消費量は、20年度まで10キログラムを下回って推移していたが、21年度は卵価が前年度を下回ったことや、厳しい経済情勢の下、より安価な畜産物への需要が高まったことにより、10,114グラム(1.7%)と前年度を上回った。

22年度は、卵価が上昇したため、前年度を下回る10,072グラム(▲0.4%)となったものの2年連続で10キログラムを上回った(図4)。

◆卸売価格

22年度の卸売価格(東京・M)は、キログラム当たり193円(10.3%)と前年度をかなりの程度上回る

図5 鶏卵の卸売価格(東京M)とひなのえ付け羽数



資料：農林水産省「鶏ひな孵化羽数」(21年12月まで)
 日本種鶏孵化協会「種鶏孵化統計」(22年1月以降)
 農林水産省「鶏卵市場流通統計」(8年12月まで)
 農林水産省「鶏卵流通統計」(9年1月以降)

鶏卵は自給率が約95%と高いため、卸売価格は、生産量の変動により大きく影響される傾向にある。鶏卵の卸売価格の動き(対前年度増減率)を見ると、昭和55年度、60年度、平成2年度、8年度、11年度、16年度とほぼ5年周期で価格のピークを迎えている。この周期的変動には、ひなえ付け羽数が大きく影響している。高卵価に刺激され、え付け羽数が増加すると、生産量が増加し、卵価の低落を招いている。

21年度の鶏卵卸売価格は、175円(▲9.3%)(東京・Mサイズ、キログラム当たり)と前年度を下回った。経済情勢が厳しい中、卵価が軟調に推移したため、卵価安定基金※から多額の価格差補てん金が交付され、卵価安定基金の財源は15年以来、6年ぶりに払底した。

22年度は、前年の卵価低下を踏まえ、需要に応じた生産が行われたこと等から、前年度をかなりの程度上回る193円(10.3%)となった(図5)。

※(社)全国鶏卵価格安定基金および(社)全日本卵価安定基金に置かれる基金のこと。